

IATSS三十周年によせて

高齢ドライバーを考えるー免許更新を断念して

岡野行秀 創価大学経済学部教授・東京大学名誉教授

1956年東京大学経済学部卒業。60～63年シカゴ大学大学院留学、64年東京大学大学院経済学研究科単位取得退学。同年経済学部助手、66年同助教授、76年教授。90年同停年退官。現在、創価大学経済学部教授。(財)国際交通安全学会設立以来会員、90～98年の間理事。現在顧問。



去る9月、75歳の誕生日を迎えたのを期に私は運転免許更新を断念した。8月のはじめに神奈川県公安委員会から「高齢者講習のお知らせ」が送られてきた。春の旧制中学のクラス会で、鎌倉に住む友人から高齢者講習を受けた話を聞いた時、9月までに免許更新を申請するかどうか考えなければと思ったが、そのまま夏を迎えた。

高齢者講習は、座学、実車、運転適性検査からなっているが、前述の友人はシミュレーターを使った適性検査で、種々の変化に対する認識や反応が自分が思っていたより遅くなっていることにショックを受けたと言っていた。

実は私はここ7～8年間ほとんど町中を運転していない。10年ほど前1、2年の間に、後遺症が残らないほどのごく軽い脳梗塞を皮切りに左眼黄斑裂孔手術、脊椎手術、狭心症ーステント治療ーと立続けに入退院を繰り返した。もし、運転中に、脳梗塞が起きたら、右眼にゴミが入ったら、心臓への血管が詰まったらなどと想像するだけで恐ろしくなり、運転は自宅の車庫から車を出し入れするだけになった。前回の免許証更新の際に視野検査をされ辛うじて合格したくらいだし、かなりの期間ハンドルを握っていないので、友人が受けた検査の結果に照らして、また最近何人かの私とほぼ同年齢の高齢ドライバーが高速道路を逆行運転した例をみて、この際思い切って運転を断念することにした。

さて運転免許証の更新を諦めて気づいたことは、なにか寂しいのだ。ここ数年ほとんど運転しなかったもので、ハンドルを握らないのが寂しいのではない。ハンドルを握ることが許されない高齢になったのだと宣言されたようで寂しいのである。免許証を持っていて運転しないのと免許証がなくて運転できないのとでは、運転しないことに変わりはなくても気分的に大いに違う。「黄昏れ人生」の感だ。

ふり返ってみると、私は1961年留学中のシカゴで運転免許を取得して以来43年間、アメリカでは駐車メーター違反で2回、エンジンをかけたままロックして駐車(それができる車だった)して1回罰金を払っただけで、2年間生活した英国と日本では無事故無違反減点ゼロだった。もともとスピードにまったく関心がないうえ、中央交通安全対策会議の専門委員を務めたり、交通安全教育普及協会で調査研究に携わったこともあって、事故を起こしたり交通規則違反をしたらみっともないと思い、常に慎重運転に心がけてきた成果である。

私は、長い間交通安全についての調査・研究に関わってきたが、道路・安全施設の規格、自動車単体の安全対策、交通規則がいかに整備されても、運転する人の安全に対する意識が低く、運転技術の自己評価が過大であれば、事故はなくならないと思う。最近の自動車単体の安全対策ー事故予防対策ーは至れり尽くせりで、眠気を催したら注意を喚起するシステムまでできるそう。しかし、こうしたシステムの導入は、早寝して十分睡眠を取らなくても、眠気を催せば注意してくれるシステムであり、居眠り運転のリスクが軽減されるのであれば寝不足のドライバーが増えるだけだろう。同様に高齢ドライバー向けの安全対策を導入した車が開発されても、高齢者自身が車の改善を前提に事故のリスクを過小評価すれば事故の発生率の目立った低下は期待できないだろう。